

遊び臺

鳴海清美



くちなしや戸棚の隅へ指輪抜く

立秋の書架から抜いて夕爾の詩

秋晴の笥に会ひし古墳山

ふらここやはぐれし夢にまだ逢へず

一軒のためにある道豆の花

骨太の指曲げて蛸糶落とす

語らへるところへ桐の一葉かな

毛氈の緋にぬくもりて雪の茶屋

金堂へ道のまつすぐ雪解風

指貫を外して含む新茶かな

花過ぎの里の真昼を郵便車

時の日や弥生遺物に囲まれて

転居して手狭となりぬ麦こがし

香水の匂へる席の空いてをり

大花野風の集まる墳ひとつ

煙草の火貰ひもらはれ薬喰

女生徒の一団過ぎて笹子かな

樟の木のかきふところ冬の鳥

日脚伸ぶ駅にて変へし目的地

紅梅の開く気のなき学問所

杭一本残る渡し場水温む

大ぶりに八十八夜の握り飯

おとうとは少年のまま鯉のぼり

児に貸してこそばゆき耳半夏生

峰雲や父のこぶしと太き眉

かなかなや小栗街道深轍

音のせぬメリヤス工場草の花

木の陰に女の紫煙昼の虫

残照に鶴の羽搏つ惜しみなし

落葉搔く音を現つに読む源氏

軒 深 し 時 折 落 つ る 冬 柏

ふ ら こ こ の 天^{あめ}地^{つち} 伸 び て を り に け り

蝉 生 れ て 昔 む か し の 忘 れ 物

子 の 指 示 に 右 往 左 往 や 捕 虫 網

夢 つ か む や も 朝 顔 の 遊 び 蔓

うしろ過ぐをみなの匂ひ菊花展

粗忽さと長き付き合ひ草虱

空室に物の音する秋の暮

けんぼなし骨の髓まで山育ち

横に這ふ煙の太し春隣

菜の花や離れて畦に本読む子

太き指太く使へり白子干し

留守電の無言三件四月尽

にほどりの浮巢離れて鳴きにけり

ペリカンの開けし大口夏の雲

男の手借る羽目になり浜日傘

汗の子のとびこんで来る厨かな

道ひとつどうやら違へほととぎす

雄鶏に好かれて二百十日かな

引き剥がす千枚漬に昆布の糸

著者略歴 鳴海清美(なるみ きよみ)
昭和6年4月14日
昭和59年「狩」入会
平成7年「狩」同人、「六花」入会
平成10年「狩」退会
平成11年「六花」同人

句集 遊び蔓

平成十三年四月二十五日発行

著者 鳴海清美

発行所 株式会社 天満書房

発行者 勢力海平

B6変形 二句組

PDF製作 俳誌のサロン